

研究主題

子どもが学びをつなぐカリキュラム・マネジメント

1 研究主題について

前研究の成果と課題

これまで、3か年計画で、「各教科等の特質に応じた学びの本質」という研究主題のもと、いわゆる「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つを備えた授業の展開をめざしてきた。各教科等の本質を追い求めるなかで、各教科等には独自性があり、それぞれの見方・考え方を十分に働かせることが、めざす資質・能力の育成につながるということが分かった。

また、各教科等の研究から、「深い学び」に共通するものも見えてきた。それを「行きつ戻りつしながら、よりよい解決の在り方を探り続ける過程に生じる学び」と本校ならではの言葉で定義付けることができた。そして、「深い学び」とおして、子どもが身に付けるべき「資質・能力」とは何なのか、子どもの姿はどのようなものであるかを明らかにすることができた。

上述の成果を各教科等の立場で報告し合うなかで、多く挙がってきた意見がある。例えば「理科の学びを算数科の学びのなかで生かす子どもの姿」や「国語科の要約する力を生かして、社会科の本時のまとめを簡潔に行おうとする姿」があったということである。つまり、各教科等の特質に応じた学びの本質に迫る授業で身に付けた「資質・能力」を、子どもは教科等の枠を超えて発揮していたのである。各教科等で身に付けた力を、教科等の枠にとどまらず、自在に発揮することで子どもはよりよく学べるのではないだろうか。そのような子どもを私たちは育てていかなければならないのではないかという視点が生まれた。その視点で、本校のこれまでの研究を顧みたときに、以下の3点に課題を見ることができる。

- ① 学びのつながりが偶発的なものであり、教師の意図や計画の下に生まれたものが少ないこと
- ② 各教科等の見方・考え方を総合的に働かせる総合的な学習の時間や特別活動の充実が図られていないこと
- ③ 生活科において幼児期の学びや中学年以降の学びとのつながりを意識した単元配列や単元構成を行うために、各教科等の学習内容との関連を考慮して位置付ける必要があること

課題①について

意図的、計画的な学習の必要性について、「中央教育審議会答申（2016/12）」では、次のように示されている。

各教科等で育まれた力を、当該教科等における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり、教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていくためには、学んだことを、教科等の枠を越えて活用していく場面が必要となり、そうした学びを実現する教育課程全体の枠組みが必要になる。

正にそのための重要な枠組みが、各教科等間の内容事項について相互の関連付けを行う全体計画の作成や、教科等横断的な学びを行う総合的な学習の時間や特別活動、高等学校の専門学科における課題研究の設定などである。

本校においては、これまでに内容事項についての相互の関連を考えた「学習プラン」（年間単元・題材配列表）を作成している。この「学習プラン」を、内容事項のみならず、各教科等で育成する資質・能力を関連付けて整備し直すことで、上記のとおり、教科等の枠を超えて子どもが学びをつなぐ学習を展開していけるのではないだろうか。

課題②について

総合的な学習の時間で働かせる「探究的な見方・考え方」や特別活動で働かせる「集団や社会の形成者としての見方・考え方」は、どちらも各教科等の見方・考え方を総合的に働かせることが求められている。そのため、総合的な学習の時間で実施される探究的な学習において、各教科等の見方・考え方を適宜必要に応じて総合的に働かせることができるようにすることが求められる。また、特別活動の本質の1つに、各教科等で学んだことを実際の生



活において総合的に活用して実践するということがある。昨年度までの研究で大切にしてきた、各教科等の見方・考え方を、総合的に働かせる総合的な学習の時間や特別活動の充実を図っていくことが、本校のめざす資質・能力をより一層効果的に育成することにつながるのではないだろうか。

課題③について

生活科の役割について、「中央教育審議会答申（2016/12）」では、次のように示されている。

生活科を中心としたスタートカリキュラムを学習指導要領に明確に位置付け、その中で、合科的・関連的な指導や短時間での学習などを含む授業時間や指導の工夫、環境構成等の工夫も行いながら、幼児期に総合的に育まれた資質・能力や、子どもたちの成長を、各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが求められる。

生活科では、幼児期の教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力に滑らかに連続、発展させることが求められている。生活科と各教科等とを関連させながら学びをつなぐことで、低学年における各教科等で期待される資質・能力を育成できるのではないだろうか。さらに、それが基盤となり、中・高学年で学習する総合的な学習の時間や特別活動の充実も図れるのではないだろうか。



本校の教育目標と育成をめざす資質・能力

昨年度、本校の子どもの実態について、全職員で教師の期待する姿や子どもの課題を話し合った。その際、本校の教育目標を実現するために育成をめざす資質・能力について以下のように整理することができた。

【学校の教育目標】 社会の変化に自ら対応することができる豊かな心をもった子どもの育成 (ともだちいっぱい あせいっぱい まなびいっぱい)	
本校が育成をめざす資質・能力	
知識及び技能	学習や生活に生きて働く、思考や行動の基盤となる力
思考力・判断力・表現力等	思考や行動の基盤となる力を状況に応じて関連付け、よりよいものにする力
学びに向かう力・人間性等	自ら課題を見付け、仲間とともに学び、学んだことを日常生活に生かそうとする力

この整理した資質・能力については、各教科等で身に付けた、教科等ならではの「見方・考え方」を各教科等内に加え、他教科等や日常の問題解決の場面で働かせていくなかで育成されていくと思われる。しかし、ここでまとめている資質・能力は、さらなる具体化を図る必要があると考える。

本年度の研究主題

以上3点の課題と、これまでの研究の成果を踏まえ、本校の教育目標を実現し、めざす資質・能力を育成するために、研究主題を以下のように設定する。

子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメント

本主題の下、教科の枠を超えてその資質・能力を発揮することができるようにしていきたい。

『子どもが「学びをつなぐ」』とは？

「学びをつなぐ」とは何か。昨年度までの研究から見えてきた子どもの姿から捉え直すと、大きく3つの側面から考えることができる。

- 「これまでの学びを生かす」こと
- 「仲間の考えを生かす」こと
- 「日常生活とつなぐ」こと

このことについて次のように整理した。



これまでの学びを生かす

授業のなかで、これまでの学びで得た知識や技能、培ってきた見方・考え方を働かせること

「これまでの学び」とは、子どもが各教科等のこれまでの学びで得た知識や技能、培ってきた見方・考え方のことである。子どもは、その資質・能力を発揮しながら授業に臨んでいる。

今日の問題は、これだから、きっとこのように学習すればいいな。

あの時、こう考えたから、このようにすればいいかな？

AとBということが分かったから2つを比べてみたら・・・。

このようなときは、表にまとめてみると分かりやすくなるぞ。 等

我々教師は、本時で子どもにどのような資質・能力を育成するのか、そのためにこれまでに培ってきた資質・能力をどのように発揮させていくのかを考え、意図的、計画的に指導していくことが必要になってくる。

仲間の考えを生かす

仲間の様々な見方・考え方にふれ、自分の見方・考え方を見つめ直し、さらによりよくすること

子どもが学びで考えを形成する際に重要な存在は、仲間である。

さっきはこのような思っていたけれど、友達の意見を聞いて、考えが変わったな。

〇〇さんは、このようなことを言っているな。つなげてみると、このようなことなのかな。

このように考えを出し合い話し合うなかで、子どもは、新たな見方・考え方に出会い、自分の見方・考え方をより豊かで確かなものにするのではないだろうか。



子どもが、様々な見方・考え方にふれるためには、子ども主体で学習を進めていながら仲間と考えを出し合うことが必要だと考える。そうすれば、子どもは様々な見方・考え方を身に付け、それを状況に応じて働かせていくようになるのではないだろうか。

日常生活とつなぐ

日常生活と学びとを双方向につなぎながら、授業に臨むこと

子どもが学びで生かすものは、決して授業で得てきたものばかりではない。特に、「生活科」を学ぶ低学年においては日常生活で身に付けてきたことが学校での学びに生かされることは多くあり、また、学校での学びがこれからの日常生活に生かされることも十分にある。

家で前に花を植えたときには、指で穴を開けて植えたぞ。アサガオもきっと同じだな。

家でケーキを分けたときには、こうしたぞ。だからこの問題では・・・。

学校にいるときの避難の仕方は分かったぞ。家ではどのようにして避難すればいいのかな。 等

子どもが、資質・能力を発揮しながら、学びを深めていくためには、学びと日常生活とを双方向につなぐことが大切である。

上記のような3つの「学びをつなぐ」姿は、これまで本校が取り組んできた各教科等の特質に応じた学びで育成してきた姿と言える。本年度は、各教科等の授業をとおして育成してきたことを、教科等の枠を超えてさらに「つなぐ」ことで、本校のめざす資質・能力の育成が可能になるのではないかと考えている。

子どもが学びをつなぐための各教科等を結び付ける「考えるための技法」

各教科等の資質・能力の関連を図っていくにあたり、思考力・判断力・表現力等をつなぐための1つの手段として、「考えるための技法」に着目した。これは、「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」において整理され、積極的に活用していくことが求められている。例えば、「考えるための技法」で紹介されている「比較する」は、どの教科等においてもよく用いられている。教師は、各教科等のねらいや本時の目標に迫るべく、思考させる場面において意図的に「比較する」という技法を活用させ、学習活動を展開してきた。これまで各教科等で育成してきた「比較する」を、様々な場面で子どもが意識的に活用し、情報を整理・分析する学習経験を積み重ねていくようにすることで、汎用的で活用可能なものとなり、一層各教科等間の関連が図られるのではないかと考える。

研究1年目に取り組むこと

以上のことを踏まえ、研究1年目においては、子どもが「学びをつなぐ」ことができるようにするために、大きく3つの内容に取り組む。

① 本校のめざす資質・能力の具体化

本校のめざす資質・能力を具体化し、教師間での共通理解を図ることで、各教科等間の学びをつないでいく根拠になるものにする。

② 内容事項の相互の関連や資質・能力の関連を図った「学習プラン」の作成

各教科等間の内容事項の関連だけではなく、総合的な学習の時間や生活科、特別活動を主軸として、育成をめざす資質・能力のつながりも意識した「学習プラン」を作成する。

③ 子どもが「学びをつなぐ」学習指導の在り方

本年度も各教科等の特質に応じた学びの本質に迫った授業の展開は継続していく。その際、教科等横断的な視点に立ち、各教科等の枠を超えて、資質・能力のつながりを意識した授業を展開していく。また、各教科等を結び付ける「考えるための技法」にも焦点を当て、「考えるための技法」を汎用的で活用可能なものにしていき、子ども自らが「学びをつなぐ」ことができるようにする。



2 研究の仮説

総合的な学習の時間や生活科、特別活動を主軸として各教科等とのつながりを意識した学習プランを作成し、「学びをつなぐ」という視点に立った授業実践を積み重ねることで、子どもは身に付けた資質・能力を教科等の枠を超えて、発揮することができるようになるであろう。

3 研究計画

年 次	研究内容
1 年次	○ 子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの創造 ・ 本校のめざす資質・能力の具体化 ・ 内容事項の相互の関連や資質・能力の関連を図った「学習プラン」の作成 ・ 子どもが「学びをつなぐ」学習指導の在り方
2 年次	○ 子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの展開
3 年次	○ 子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの発展

4 本校のめざす資質・能力の具体化について

カリキュラム・マネジメントを行っていくうえで忘れてはならないのが、カリキュラム・マネジメントの目的はあくまでも「本校が育成をめざす資質・能力」を育成することであり、カリキュラム・マネジメントそのものが目的になってはならないということである。

先に述べたように、前年度末に、本校のめざす資質・能力は明文化している。しかしながら、ここに示されている資質・能力は、我々が学習プランをつなぎ、各教科等の学びをつないでいくには具体性に欠けていた。

そこで、現在明文化されている「本校のめざす資質・能力」の文言を、より簡潔で、共通理解しやすい言葉へと具体化していこうと考えた。

本校が育成をめざす資質・能力を具体化していくために、以下のような手順で話し合いを進めていった。

- (1) 本校の子どものよさ、課題を洗い出す。
- (2) 既存の「本校が育成をめざす資質・能力」の文言と照らし合わせる。
- (3) 学習指導要領においてめざしている力との関連を見る。
- (4) 本校が育成をめざす資質・能力を具体化する。

(1)～(4)それぞれの取組について、以下に詳しく述べる。

(1) 本校の子どものよさ、課題を洗い出し

改めて本校のめざす資質・能力を具体化していくために、本校の子どものよさ、課題を洗い出すことにした。そこから、本校の子どもが伸ばしていくべき具体的な力が見えてくるのではないかと考えたからである。そこで、職員からよさと課題を挙げてもらい、それを「〇〇力」等の言葉で整理した。



よさ

- 知的好奇心が旺盛で、積極的に学びに向かう姿
- 一人一人が意見をもち、自分の考えを臆せず発言する姿
- 枠外のことを考え付く、豊かな発想
- 互いの考えを受け入れ、仲間とともにかかわりながら学ぶ姿
- のびのびとしていて素直な性格
- 人と進んでかかわることができる
- パワー、エネルギー、何事も楽しそうに行う
- 新たな問いを生み出し、深く追究していく姿
- こだわりが強い
- 物怖じしない
- 知識が豊富
- 自力でやろうとする力
- 自分に関心をもつ
- 一点集中

よさから見えてきた力

- 学びを楽しむ力
- アウトプット力、発信力
- キャッチボール力
- 自己表現力
- 協働力
- 汎用力
- 好奇心
- 共有力
- 感受力
- 自己肯定感
- 説明力
- 他者理解力
- 追究力、探究力
- 受容力、包容力
- 創造力
- 行動力
- エネルギー
- 適応力

課題

- 自己中心的で相手や周りのことを考えて発言や行動ができない
- 根気強く追究することを好まない。すぐに答えを出したがる
- 枠にはまり、フレキシブルな思考ができない
- 論理的に言葉で説明できない、書けない
- 思い込み、読んだつもりが多い、丁寧さ、緻密さ
- 他者のできないこと、自分と違うことを必要以上に気に掛ける
- 学んだことを日常に生かそうという意欲はあまりない
- 相手の顔を見て、状況を判断して考えを読み取ろうとする力
- 受け身
- パワーコントロール
- あいさつ
- 覇気がない
- 時間への意識
- 礼儀
- 規範意識

課題から見えてきた力

- 気付く力
- 自己コントロール力、自律
- 粘り強く取り組む力
- 見通し力
- 自分で解決する力、主体性
- 何とかしようとする力
- 忍耐力
- 自己内省力
- 他者理解力
- 突破力
- 課題発見力
- 生活力
- 協働力
- 論理的思考力
- 受容力
- 状況判断力
- 協調性
- 運動能力

(2) 既存の「本校のめざす資質・能力」の文言と照らし合わせ

挙げた力を既存の「本校で育成をめざす資質・能力」の文言と照らし合わせることで、本校が当初育成しようと考えていた資質・能力にかかわる力を絞りこむことができた。

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
学習や生活に <u>生きて働く</u> 、思考や行動の基盤となる力	思考や行動の基盤となる力を <u>状況に応じて関連付け、よりよいものにする</u> 力	<u>自ら課題を見付け、仲間とともに学び、学んだことを日常生活に生かそうとする</u> 力
	<u>状況に応じて関連付け</u> ○汎用力 ●状況判断力 <u>よりよいものにする</u> ○発想力 ○創造力	<u>自ら課題を見付け</u> ○好奇心 ○追究力、探究力 ●自分で解決する力、主体性 ●気付く力 ●課題発見力 <u>仲間とともに学び</u> ○共有力 ●協働力 ●受容力 ●他者理解力 <u>生かそうとする</u> ○汎用力

(3) 学習指導要領においてめざしている力との関連

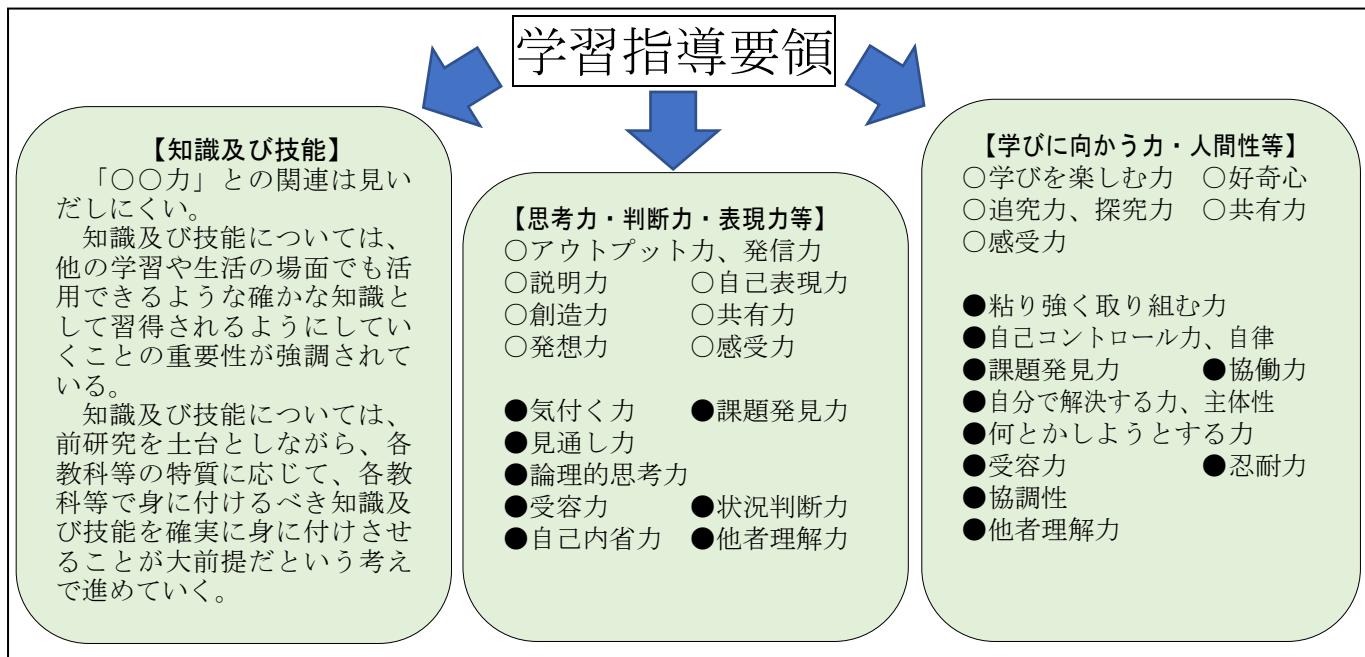
「学習指導要領解説 総則編」の 36 ページから 38 ページにかけて、学習指導要領においてめざしている資質・能力の 3 つの柱「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」において、具体的にどのような力の育成をめざすのかということが明文化されている。

(思考力・判断力・表現力等の例)

学校教育法第 30 条第 2 項において、「思考力、判断力、表現力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力と規定されている。この「知識及び技能を活用して課題を解決する」という過程については、中央教育審議会答申が指摘するように、大きく分類して次の三つがあると考えられる。

- ・ 物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
- ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・ 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程 【学習指導要領解説 総則編 37～38 ページより抜粋】（下線は本校）

学習指導要領解説で述べられていることと、本校が考える「〇〇力」等との関連を見だしていくことで、本校のめざす資質・能力を具体化する根拠とした。



(4) 本校のめざす資質・能力を明確化

(2)と(3)で整理してきたことをとおして共通した力をまとめると以下のとおりとなった。

○創造力	○発想力	○学びを楽しむ力	○共有力
○追究力、探究力	○好奇心		
●受容力	●状況判断力	●他者理解力	●課題発見力
●協働力	●協調性	●自分で解決する力、主体性	

これらに関連のあるものでまとめ、以下の5つに整理することとした。

- ①創造力（発想も含む）
- ②状況判断力
- ③探究力（学びを楽しむ力、好奇心、自分自身で粘り強く解決する力も含む）
- ④課題発見力
- ⑤協働力（他者理解、受容、共有、協調性を発揮することも含む）

また、「学習指導要領解説 総則編」の47ページにおいて、次のような記述がある。

各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

この「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」は、教科等横断的な視点に立った資質・能力の学習の基盤となる資質・能力として位置付けられている。そこで、その他の力を支える基盤として、これらの3つの力も加えることを考えた。ただ、「問題発見・解決能力」については、「課題発見力」という言葉が既に存在するため、「言語能力」と「情報活用能力」についてのみ本校で育成をめざす資質・能力のなかに加えることとした。

さらに、「状況判断力」については、「論理的思考力」という言葉へ変更することとした。「状況判断力」は、「今置かれている状況において何が必要か、何をすべきかを判断する力」であり、そのためには論理的な思考力は必須であるという考えからである。

- ①創造力（発想も含む）
- ②論理的思考力
- ③探究力（学びを楽しむ力、好奇心、自分自身で粘り強く解決する力も含む）
- ④課題発見力
- ⑤協働力（他者理解、受容、共有、協調性を発揮することも含む）
- ⑥言語能力
- ⑦情報活用能力

最終的に整理された資質・能力が以下の8つである。



最終的に絞り込まれた力のなかに、新たに「感性」を加えている。学習指導要領においては、情報技術の飛躍的な進化、グローバル化等が急激に進展する社会だからこそ、人間ならではの「感性」の重要性が強調されている。これは、「学びに向かう力・人間性等」の評価に個人内評価として「感性や思いやり」等の項目を掲げていることから伺える。元々、職員からも「感受性」という言葉も挙げられていたことから、話合いの末、新たに「感性」という言葉についても育成をめざす資質・能力に加えることとした。

5 内容事項の相互の関連や資質・能力の関連を図った「学習プラン」の作成について

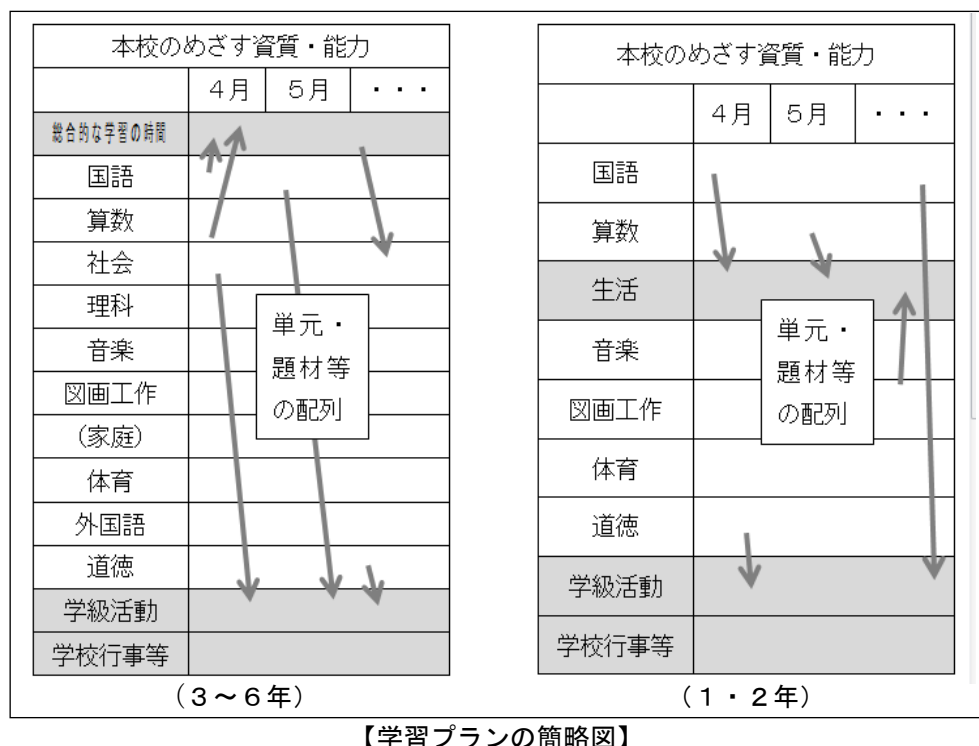
本校では、「本校が育成をめざす資質・能力」を育成することを目的として、1年間で学習する各教科等の単元や題材を配列し、俯瞰して見るができるようにした「学習プラン」を作成している。カリキュラム・マネジメントは、子どもや学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、その実施状況を評価してその改善を図っていくことが重要である。そこで、「学習プラン」の作成及び改善をととしてカリキュラム・マネジメントを具現化する取組を行った。

先に述べたが、これまでの研究を顧みて明らかになった3点の課題に基づき、本年度は次のような観点で「学習プラン」の改善を図ることとした。

- (1) 本校が育成をめざす資質・能力の育成を図るための学びの意図を明確にするための形式
- (2) 総合的な学習の時間、生活科、特別活動と各教科等とのつながり
- (3) 「考えるための技法」のつながり

(1) 本校が育成をめざす資質・能力の育成を図るための学びの意図を明確にするための形式

本校が育成をめざす資質・能力を最上段に明記することで、全学年が同じベクトルで「学習プラン」を作成し、実施及び評価、改善を重ねることができるようにした。また、縦軸に「各教科等」、横軸に「単元・題材等」を配列することで、教科等横断的な視点に基づくつながり（縦のつながり）と、1つの教科等における単元・題材等相互のつながり（横のつながり）を意識し、各教科等の単元・題材等の指導計画を作成することができるようにした。



(2) 総合的な学習の時間、生活科、特別活動と各教科等とのつながり

総合的な学習の時間や生活科、特別活動と各教科等との学びのつながりを可視化するため、単元・題材等の配置を工夫した。資質・能力のつながりを基に考えると、そもそもすべての教科等、単元・題材が、ある程度のつながりをもっており、つなぐことのできる単元・題材等は無数に存在するといえる。そこで、「この単元の前に、このような方法で考えることができるようになってほしい」、「この単元の前に、これはできるようになってほしい」等、意図的、計画的に育成したい資質・能力を考慮して、単元等の順序を入れ替えて配置するようにした。特に学習内容のつながりが深いものや、資質・能力を身に付けさせたり、身に付けた資質・能力を活用させたりするうえで有意義な相互関連があると考えられるものは、矢印で示している。

(3) 「考えるための技法」のつながり

前述のとおり、本年度は、「考えるための技法」に焦点を当てて研究を進める。この「考えるための技法」を「学習プラン」上に可視化することで、各教科等で育成すべき資質・能力に加え、その学習過程で思考する際に必要となる情報の処理方法を具体化し、意図的、計画的に関連付けることができるようにした。「学習プラン」上には、「【 】」で明記し、特に、総合的な学習の時間や生活科、特別活動とかかわりの深いものについては矢印で結んでいる。

右図は、第5学年の「学習プラン」の一部である。各教科等で身に付けた技法を総合的な学習の時間で活用することもあれば、総合的な学習の時間で身に付けた技法を、他の教科等で活用することもある。そこで、各教科等で子どもが目的に応じて意識的に技法を活用することで、その有用性を感じ、他の学習にも生かすことができるようになると考えた。留意すべきは、技法を身に付けさせるこ

月	4月	5月	6月	7月
総合的な 学習の時間 「わかたけ」	課題設定【見通す】	大豆のソイヤー 大豆育成【統合・関連付け】	個人調査【比較・分類】	
国語	この言葉、あなたならどう考えるの 【比較・抽象化】 事実と考えを区別しよう④【理由・関連】 人物の思いを音読で伝えよう④【比較】 【教材：たいじょうぶ たいじょうぶ】 図書館へ行こう④【多面的】	筆者の伝えたいことをまとめる④ 【比較・焦点化・関連】 【教材：動物たちが教えてくれる海の中の④】 漢字の成り立ち④【分類】 知りたいことを聞き出そう④【比較】	環境問題について報告しよう④ 【見通す・関連・比較】 山場で起こる変化について考えよう④ 【見通す・焦点化・比較】 【教材：世界でいちばんやさしい音】 文の組み立てをたどろう④【比較・抽象化】	問題を解決するために話し合おう④ 【比較・評価・関連】 歌謡の使い方④ 【比較・分類・焦点化】 本は友達④ 生活に広げよう① ・ノートを書く① 目的に合った筆記具④
書写	学習の準備をしよう②	組み立て方①【よう】③ 「道」（硬筆・毛筆）	漢字どうしの大きさ④ 「白馬」（硬筆・毛筆）	
社会	世界の中の国土④ 【見通す】 ※領土	国土の地形の特色と 人々の暮らし④ ※海津市 【比較】	国土の気候の特色と 人々の暮らし④ ※彦根市 【比較】	くらしを支える食料生産④ 【比較】 米づくりのさかな地域④ 【関連付け】
算数	わくわく 算数 学習①	1 整数 と小数 ④ 【関連付け・抽象化】 2 体積③ 【抽象化】	3 比例 ② 【多面的・多角的】 4 複習① 小数のかけ算④ 【統合】	4 小数のわり算④ 【統合・関連付け・構造化】 6 合同な図形④ 【見通す・抽象化】 人文学① どんな計算に なるのかな④ 算数の自由研究① 複習①
理科	自然を 読みとく ①	花の つり ②	植物の発芽と成長④ 【比較・条件整理】	メダカのたんじょう④ 【順序付け】 ヒトのたんじょう④ 【関係付け・比較】 台風と気象情報 ④ 【順序・比較】 自由 研究 ①

【第5学年学習プランの一部】

とを目的化しないことである。本単元等や本時の目標は何か、それを達成するためにどのような見方・考え方を働かせるのかを明確にしたうえで、「考えるための技法」の活用を図ることが重要である。

令和3年度 第6学年 学習プラン

[illegible]